子規全集

第十三卷　小說　紀行

講談社

N. D. C. 910　796 p　20 cm

子規全集　第十三卷
小說　紀行

定價　參千八百圓

昭和五十一年九月二十日　第一刷發行

著者　正岡子規
編集代表　正岡忠三郎
發行者　野間省一
發行所　株式會社　講談社
東京都文京區音羽二―一二―二一
電話　東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)
郵便番號　一一二　振替　東京八―三九三〇
印刷所　株式會社　精興社
製本所　大製株式會社
本文用紙　三菱製紙株式會社

©正岡忠三郎　一九七六年
落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

0395-417138-2253(0)（子規）　Printed in Japan

小說　紀行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

小說

龍門……九
銀世界……二五
山吹の一枝……六五
月の都……一三五
一日物語……一六三
當世媛鏡……二〇九
月見草……二七三
花枕……二八一

曼珠沙華……二九七
我が病……三四七
〔レ・ミゼラブル〕（翻譯）……三七一

紀行

水戸紀行……三七七
水戸紀行裏四日大盡……四一三
しやくられの記……四二九
かくれみの……四五五
山路の秋……四七〇
かけはしの記……四七二
大磯の月見……四八六
大磯に引網を見る記……四九〇
旅の旅の旅……四九三

第六回文科大學遠足會の記……五〇五
日光の紅葉……五一五
高尾紀行……五二一
鎌倉一見の記……五二六
はて知らずの記……五三〇
三方旅行……五七六
發句を拾ふの記……五八六
上野紀行……五八九
そゞろありき……五九二
王子紀行……五九五
開遊半日……五九八
總武鐵道……六〇五
散策集……六〇九
夕涼み……六二三

道灌山……六二七
本郷まで……六三二
小石川まで……六三五
龜戸まで……六三八

小説草稿

月の都……六四三
曼珠沙華……六八〇

参考資料……七〇五

解題　蒲池文雄……七三三
解説　野間　宏　司馬遼太郎……七七三

小
說

編注

小説は子規が終生強い關心をいだいたジャンルの一つで、ここでも彼は常に新しい試みを積み重ねた。本卷には、その努力の軌跡としての初期の「龍門」「銀世界」から、問題作「月の都」を經て「我が病」に至る全作品を收めるとともに、「月の都」「曼珠沙華」については草稿本を卷末にあわせ掲げ、また、「レ・ミゼラブル」の翻譯稿斷片（新資料）を收錄した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

龍門

第一回　つまづく石も縁のはし

年の暮といへば家持は借金催促の異名かと思ひ、店屋の小僧はせはしいことの符牒かと思ふが中にも、これほど氣樂なことなしと喜ぶは學校の休業にあひたる書生のみなるべし。こゝも未來は一等道路となる程ありて、ほし店の燈許りもおびたゞしく往來も繁き本郷通り横へとまがる二三人の書生連、一人「今輔がかゝつたぞ。」又一人「圓遊も出るぞ。」

とわめきつゝ若竹亭へ入りにける。「いらつしやい」の聲諸共に上りて見れば、話ははや始まり、客は座敷にみち〳〵たるに、せん方なく二階に座をしめて、しばらく話も聞かずぐるりを見まはしゐたる折から、引續き上り來る二人の女連は母子にやあらん、五十許りの老女が十五六の美くしき娘をつれて前の書生連の隣りに坐はりける。此中一人の書生は、かの女づれが二階段を上る時より坐はりきる迄一伍一什をながめゐしが、つれの一人に向ひ、

書生「オイ、中條、ビューテイがきたぞ。

中條「どこだ〳〵、オイ身延、敎へないか。
身延「近目は困るな、大きな聲するなイ、隣りだ隣りだ。今一人の風見といへる書生が、
風見「オイ皆聞かないか、文樂が出たぞ。
文樂はお定りの文句すみて、
文樂「御緣といふものは奇體なものでございますナ、ちよつとしたことが所の名にも緣のあることが澤山ありますナ、どん〳〵橋があるかと思へば、神樂坂があるし、岩戸町もあるし、さうかと思へば、坂の上に林樣といふ御邸があつて、お內はピイ〳〵だといふ……あんまりあてにはなりませぬが、マア今晩なんどデコ〳〵においでになつた御客樣でも皆御緣があればです。かうやつて同じ晩に若竹亭へ約束なさつた樣に御出になるといふも深い御緣には違ひございません。話し家だつて御緣があればこそ、博學の御客樣がたに御目にかゝる樣な……落語家に御緣があつてもどうせ面白いことは……御無心に出かける位な者で……わけて男女の緣は遠いやうで近いやうなものだとか申しますが、薩州のかたと奧州のかたとで夫婦になつたり、一寸一度位見た者が戀わづらひを起したり、醫者の藥も箱根の湯治もちつともしるしがないといふ樣になつたり……。
此の時身延は橫眼にてかの娘を見る、娘はそんなことには氣のつかぬ風にて、高座をながめてゐる。文樂はこれよりこまかき人情話にうつる。其間身延は時々彼女の橫顏に向つて秋波を送れども、其波動は彼方には傳はらぬ樣なれば、心ひそかにいらだてどもせんすべもなくて、默止ける、風見はニコリ〳〵笑ひながら話にのみ氣をとられ、

風見「どうだ身延、面白いぢやないか。

と度々問ひかくれども、身延はウン〳〵と器械的に口を動かすのみ、固より心こゝにあらざれば問はるゝとも知らず、又自ら答へしとも知らざるべし、眼は高座を見つめゐるものから、眼の玉の働かぬは圓遊の鼻に驚きしわけにもあらざるべし、左れば全く神經を失へるにやと思へば、時として却々敏捷に働くといふ證據はわきの方に何か一寸物音がすればそれを機會にキョロ〳〵とまはりを見まわし、とゞ彼の處女の横顔に見至りて恨めしさうに正面をむいて再び眼の玉をすゑるはいかにも心の安からぬ様也。かゝる折しも「お茶はよろしう」といふ聲の耳元に響きしに氣がつきて見ればいつか中入となりたれども、自分はそれ迄高座の燭臺とにらめつくらせしかと思へば我ながらはづかしくなりたり。斯くて菓子を喰ひ茶を飲み、三人は雜談しながら、身延は土瓶を取つて後におかんと手をまはすはづみに、隣にゐし娘は厠に往かんとや立ちかゝりて、ふみ出さんとする足のかの土瓶にあたりしかば、身延は思はず取り落し、茶は疊の上にこぼれける、乙女は猶勢ひの止めがたくや、つまづきしまゝ前に置たりし身延の帽子をふみたれば顏を赤くして驚き、あはてゝ、

娘「オヤ御めんなさいまし、どうもすまないことを、ほんとにどうしたら……おめしはぬれはしませんでしたか、おかぶりものまでふみまして、

といふも半は口の中、

身延「イヤどういたしまして、ナニ大丈夫です。

口の中では「もちつとふんでくれ」といひしにはあらざるか、娘のつれの老女も來て佗言しつゝ

こぼれし茶をふきとり、ことおさまりたり、娘は厠より歸りしが座に直りて茶をくみ菓子を紙にのせて身延の前に出し、

娘「少しばかりでございますが。

といふも老女の指揮なるべし。身延は胸どき〳〵してとみには返事もいでず、之をしほにして何かいひ出さんとするものから、いよ〳〵言ふべきことはなくて、頻りに口をもぢ〳〵せしが、終に何か思ひ定めけん、娘に向ひていひ出さんとする時、急に表の方噪がしく何事やらんと人皆耳を欹てて互ひに顏を見合す折から「火事だ〳〵」と呼ぶ聲の頻りに聞えければ、すは火事よと座中の人は一同にたちさはぎ、一度に木戸をいでんとするにぞ、混雜大方ならず。

木戸番「火事は御遠うございます、お靜かに、

と制するを聞かばこそ、殊に書生連は我さきにともみあひける。中條、風見等の連中も火事と聞きては、おのれらがゐる學校も心許なしとて促すにぞ、身延もせんかたなく、心を殘してたちいでぬ。

第二回　渡りに舟

家々にかざる松の綠は君が八千代の色をこめ、竹の節の直なるは政のよこしまならぬをしめす。空に舞ふ凧は田鶴の飛ぶにやあらん。軒端に行きちがふ羽子は蝶のうかれ出したるにやと疑はる。初霞は大宮城よりたち上りて春風は日章の旗を翻へす。新玉の年たちかへる今朝の景色は實に日の本の春なれや。酒になやめる下戸あれば、餅にもたれし上戸あり、參賀の馬車は馭者揚々たれども、

掛聲のたかきは醉漢を踏みつぶさじとの用心ならん。一むれ五六人の書生連は知らぬ家におしかけて牛飲馬食、一文いらずの新年宴會を開く覺悟なるべし、斯くまでに凛々雍々たる太平の時代に生れし身は、鼓腹擊壤の昔をも羨むには足らざるべし。

少女「一夜あくればにぎやかに、お飾たてゝ松飾り〳〵。……お梅さん、追羽子しませうや、ここに羽子板も羽子もあるから、サアようございますか、やりますヨ、ソラいけませんよ、うけないで、お尻を一つぶつて……アラずるいわ、逃げてサ。

こゝは麻布のある町の立派なる家の中庭なり。一人にてしやべりながら狂ひまはる十許りの少女は、江戸の水にて產湯せしものは、かくまでに唇の薄き者にやと驚くばかりの多言家也。お梅さんとよびかけられし娘は、色白くして眼尻はつり上り、鼻は低くけれどもよく透り、口元の尋常なる所に一點の愛嬌あれども、滿面に笑をこぼすことはいと稀也。そのふるまひを見れば大人びたれども、體の小さき故か子供らしき所あり、あけて十八になると自分は羞かしさうにいへど、見かけは二ツも三ツも若き方也。折しもこゝに來りたる一人の書生は二十歳位なるべし。スコツチの洋服に同じ地の外套をつけたるが、ぬき足して追羽子に餘念なき小娘の後にまはり、羽子板をふりあげたる其の手をしつかと握りければ、

少女「アラいけないよ。誰。

とふりかへり、

少女「太井さんだよ、にくらしい。太井のばか野郎。

お梅「お目出度う……。

太井は思はず笑ひかけしが、又氣がつきしや、すぐに口迄くり出せし笑を無理にをしさげ、

太井「やあ御目出度う。

といひしは平生聞きなれぬ猫なで聲なりしとは丁度通りかゝりし此家の炊女(をさん)の惡口なり。太井は小娘に向ひ、

太井「お松さん、わたしも追羽子にはいらう。

お松「いやだよ、太井さんなんざア。いつかも羽子板をかしてくれつて無理にとつて。それもいいが後にいつた羽子を羽子板の表でつくのだもの。そして新駒の顏にあばたをこしらへてサ。誰が貸してやるものかね。

太井「コリヤいゝ面(つら)の皮だ、暫時之にて見分(けんぶん)しよう。

お松「サアお梅さん、おつきなさいよ、ようございますヨ、アラ今のは風がふいたから、うけられなかつたのですヨ。ねえ太井さん。

太井「ナーニ、さうぢやないヨ。

お松「いやな太井さんだこと、お梅さんのひいきをしてサ。

といへば、お梅の顏は火の如く熱したり。意味なき子供の戯れにも深き意味をつけて、自らはづるは、おぼこの常なりと思へば、いといぢらしけれ。太井は制しかねてや、覺えず笑ひを滿面にまきちらし、お梅の顏をさもほれ〳〵とながめてゐる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com